

目的 長着を着装する時に問題となるのは、下半身の丈と幅そして上半身の衿である。これらの箇所は長着の形態を決定する重要な箇所であるが、逆に着崩れのし易い箇所である。今回、着崩れに関する考察の一環として、平面衿の立体的形態について検討を行った。現在では、背肩部付近の衿付け線や衿合わせの高さにかかなりの自由度をもたせた着方も流行しているが、目的によって衿の形を整えることが必要であろう。

方法 衿としては、面内方向の変形をしにくい厚さ0.2mmの塩化ビニルを幅5.5cmに切り取ったフィルムを用い、体表近似モデルとしてはキイヤボデ185を用いた。衿の設定条件としては後面での衿付け線の位置および前面での衿合わせの位置を与え、衿付け線を体表面に沿わせることとした。後面での衿付け線、前面での衿合わせの位置を変化させ、各場合の衿の三次元立体形状を測定した。測定方法は、フィルム面につけた1cm間隔の基準線と衿端線あるいは衿付け線との交点の座標値をマルチン式計測器で計測した。

結果 得られた三次元直角座標値から、コンピューターグラフィックスを用いて正面図、側面図、平面図を描き、前面および後面の衿合わせの位置の違いによるシルエットの相違を検討した。この結果、①後面の衿付け線の位置が一定ならば、前面の衿合わせの高さが低くなるにつれて、後面で衿端線は頸に近づくことが側面図、平面図から観察される。この場合、側方での衿のシルエットの変化はほとんどみられない。②前面の衿合わせの位置が一定ならば、後面の衿付け線の高さが低くなるほど衿の後方および側方での左右への傾斜は強くなり、肩で衿が寝てくることが、正面図、側面図、平面図から観察される。